

関西農業史研究会々報

No.13 - 1980.6.27

第27回例会は、4月26日(土)2時から6名の参加で、2用がいました。報告は、京都大学研修員の石田浩氏による中国北部の農業に関するものでした。以下は、その報告要旨・討論要旨です。

第27回例会 石田 浩氏

「1930年代華北棉作地帯における農民層分解」
特に冀東農村の富農経営の性格に関連して

- I. はじめに
- II 資料の紹介と調査村の概要
 - (1) 資料の紹介
 - (2) 豊田県米飯村の概要
- III 富農経営の性格
 - (1) 商品作物としての棉花栽培
 - (2) 富農経営の農業生産力
 - (3) 米飯村の農民層分解
- IV おわりに

■戦後の日本における中国史研究者の潮流としては、旧中国社会に「アジヤ的停滞論」の適用を否定する傾向にある。というのは、当時の中国には内的自立の可能性がなく、中国が「停滞」から脱却するためには外部からのインパクトを必要とし、そのためには日本帝国主義による「大東亜共栄圏」構想があるとして、「アジヤ的停滞論」は日本帝国主義の中国侵略を正当化する理論とされたからである。戦後、研究者は中国侵略に加担したことを反省し、中国における「停滞」を否定すべく、積極的に自立的経済

発展の可能性を例証することに傾注した。工業においては、棉工業の研究や民族資本が革命に果たした役割等が研究され、農業においては、商品貨幣経済の農村への浸透により、農民層の両極分解が起こり、一方の極に農村ブルジョアジーが析出していくとする研究がある。

■報告者は特に中国農業に関心を持っており、上述の見解では、①旧中国農村の理解、②解放後の農業政策の意義、③現在の発展途上諸国の経済発展と大いに関わりがあり、以上の三点によって研究に値する。報告では、豊潤県米廠村における3ヶ年間の農家経済調査資料を利用して、いわゆる富農経営の性格とその生産力構造と、米廠村における農民層分解の分析を通じて考察した。

■報告では統計操作の便宜上から、50畝以上を上層農、25~50畝を中間層、25畝未満を下層農に三区分した。一般に上層農が富農と考えられるが、その詳細についてはここでは触れない。上層農は土地・役畜・農具の所有において他層よりも優位にあるが、華北における犁耕体系から見れば不十分である。ところで、この生産手段所有の優位性が農業生産力の優位性となってあらわれているかどうかを見ることができずともなかつた。まず、①農業生産は自然条件に左右されており、ひとたび旱害等に見舞われた場合、大経営である上層農ほどその立直りが遅い。②各種附加益が上層農ほど大きい年もあるが、これは生産力の優位に基づくので

はなく、農産物価格が上昇した時に販売できる優位性に基づいていす。すなわち単位当りの収量、各種経営費を見ても他層の方が優位にあり、この点から純収益が大きいとは考えられない。農産物を高価格で販売できる結果、粗収益が大きくなり、比較的経営費が大きくても、他層よりも純収益が大きくなっているところである。

□その結果、農民層分解は両極分解傾向にあるのではなく、中層農が肥大化している。すなわち、戦争により「満州」等への出稼地が少なくなり、村民の生活の場は農業に集中し、そのために中層農、下層農は経営規模の拡大を志向し、土地獲得競争は激烈である。雇傭労力を多投し（経営費に占める労銀の割合は、1937年39.6%、1938年30.6%、1939年32.3%）、経営内容が他層に比べて優位でない上層農は、取えてこの競争の渦中に入る必要もなく、安定した農外収入（教師や役人等）で、農家経済は安定している。

□このような上層農の農業におけるブルジョア的発展の可能性は全く見られず、ある一定規模の階層を越えると寄生地主化する可能性があり得る。（石田記）

[討論要旨]

討論は、主に富農経営の性格をめぐり、2行なわれた。①小作料の納入形態について、②村外の商人との関係、販売価格の問題、③農業生産における農具、畜力等の所有、及び生産上の意義等が問題に上った。続いて1930年代後半の中国経済社会の特徴と関係して農業生産を見るとうかがが討論された。(便記)